古代　第122号　2009年3月

土器容量組成からみたトビニタイ文化と擦文文化の関係

榊田朋広

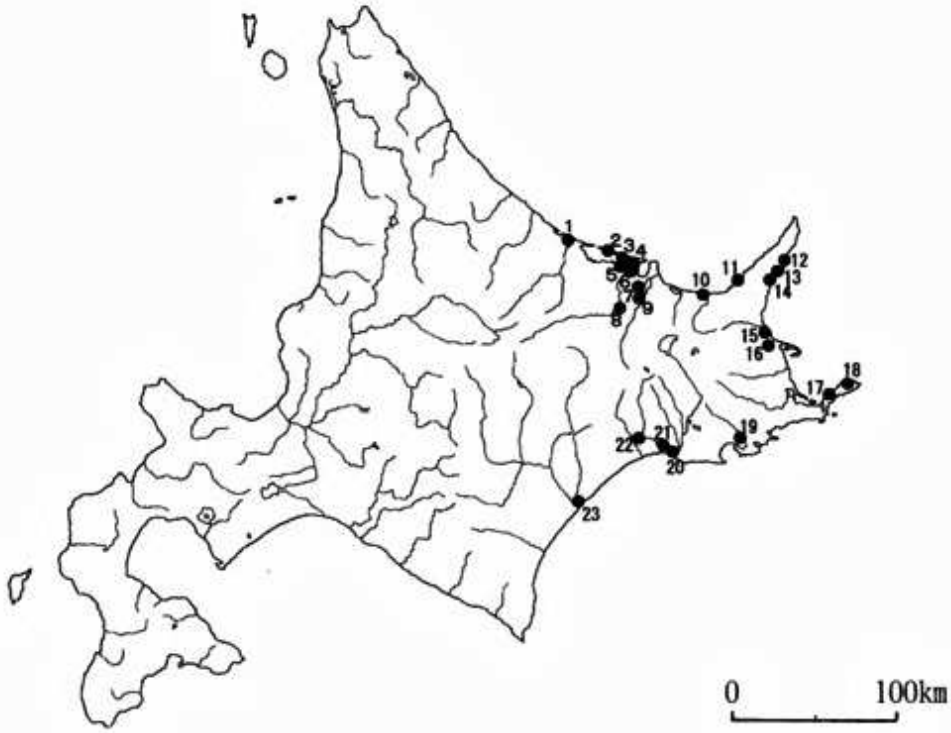
要旨　本稿では，「オホーツク文化が擦文文化に吸収されていく過程」として位置づけられることの多いトビニタイ文化について，主に土器の容量組成分析から検討をおこなった。その結果，トビニタイ文化の土器容量組成は，オホーツク文化とも擦文文化とも異なる独自の様相を呈することが判明した。また，トビニタイ文化集落の住居出土土器を容量組成のあり方から捉え直すことによって，トビニタイ文化集団が自律的に働きかけ擦文文化集団と交流をおこなっていると評価せざるを得ない様相を見出すことができた。以上から，「異文化の融合」が議論の焦点となるトビニタイ文化研究においては，擦文文化からの影響とともにトビニタイ文化の独自性・主体性をも視野に収めた分析視点が常に必要となることを説いた。

はじめに

9世紀後半頃，北海道東部オホーツク海沿岸地域に展開したオホーツク文化は，擦文文化の強い影響を受け，トビニタイ式土器に代表される独特の文化コンプレックスを形成するようになる。この文化コンプレックスの出現は，オホーツク文化と擦文文化という，その起源や内容をまったく異にする2つの文化の接触を端的に表徴する事態として，これまで注目されてきた。オホーツク文化ないしその系統を引くと考えられるトビニタイ文化はその後，全道的に分布を広げた擦文文化に同化・吸収され，消滅してしまうことがよく知られている。しかし，後続するアイヌ文化においては，擦文文化のみならずオホーツク文化に近い要素も見られることに一定の注意が払われており（渡辺 1974・藤本 1979a・宇田川 1989など），アイヌ文化成立前夜におけるこの2つの文化の接触が，「擦文（影響）→オホーツク・トビニタイ（消滅）」というような一元的構図のもとで理解できるほど単純なものではないことは早くから指摘されていた。本稿は，トビニタイ式土器を分析し，その文化コンプレックスを担った集団の自律的・主体的動向を鮮明にする中から，近年でもしばしば用いられることのある先の一元的構図を見直し，むしろ「相互の主体的動向」を視野に収めつつ「異文化の同化」を捉えなおす視点を当該期研究のなかに位置づけることを企図するものである。

1．トビニタイ文化に対する認識について

この文化コンプレックスについては，「トビニタイ文化」という名を冠し独自の考古学的文化



1. 湧別川西　2. ワッカ　3. ライトコロ川口・ライトコロ右岸・栄浦第一・栄浦第二　4. 常呂川河口
5. 史跡常呂・岐阜第二・岐阜第三　6. 朝日トコロ貝塚　7. 嘉多山・嘉多山3　8. 広瀬　9. 豊里
10. ピラガ丘第Ⅲ・須藤　11. オタモイ1　12. トビニタイ　13. 船見町高台
14. オタフク岩第Ⅰ地点・松法川北岸　15. 伊茶仁野化場第一　16. 当幌川左岸竪穴群　17. 西月ヶ丘
18. トーサムポロR－1地点　19. 下田ノ沢　20. 幣舞2　21. 北斗　22. 下仁々志別竪穴群　23. 十勝太若月

第1図　本稿で対象とする遺跡

として認める立場がある一方（藤本 1979a・b，大西 2001・2003），あくまで「オホーツク文化の終末形態」として位置づける立場もあり（大井 1970，山浦 1983，澤井 1992），意見の一致を見ていない。その原因のひとつに，トビニタイ文化にオリジナルの考古学的要素を明示し，その時空間的展開を追究する研究が，藤本強のそれを除きおこなわれてこなかったことが挙げられよう。当該期研究においては，上記コンプレックスの内容をオホーツク・擦文両文化要素との比較のみによって評価するという方法がどの研究者にも共通していた。これによれば，「オホーツク文化的要素の消滅・擦文文化的要素の浸透」という通時的視点で捉えられることになり，トビニタイ文化を構成する要素の独自性は薄らぎ，逆に「擦文文化に吸収されていく過程」がクローズアップされ，トビニタイ文化は「オホーツク文化の終末形態」として位置づけられることになる。大西秀之は，トビニタイ文化集団の主体性を強調しているものの（大西前掲），同様の方法に立脚するため「擦文文化に吸収されていく受身の存在」としてのイメージを払拭することができず，その主体

性を考古学的に明確にしているとは必ずしも言えない。コンプレックスの内容をオホーツク・擦文両文化要素から相対的に評価する視点を分析の前提とするかぎり，「トビニタイ文化」と「終末形態としてのオホーツク文化」との違いを明確にすることはできず，したがって，トビニタイ文化を考古学的文化として認めない見解に対し，論理的な批判を下すことはできないのである。

一方，筆者は先の論文でトビニタイ式土器を分析し，その型式学的独自性と系統性の存在を突き止めた（榊田 2006）。さらに，トビニタイ式土器と擦文土器との一定の交渉関係の存在と，擦文土器に対し交渉を強化していく通時的な関係の変化を明らかにし，その背後にある土器を製作した集団の主体性を読み取ることができた（榊田 2007）。筆者は土器型式論から導かれた見解にもとづき，トビニタイ文化を独自の考古学的文化として（少なくとも独自の土器文化として）認識する立場をとっている。この立場による限り，まず擦文文化にもオホーツク文化にもないオリジナルの要素を抽出し，その分布の広がりを把握する，という基礎作業がトビニタイ文化の枠組みを明確にする大前提となることは言うまでもない。そのうえで擦文文化との比較をおこなうことで，当該期研究の焦点となる「異文化の同化」という事態を考古学的に理解し，ひいてはアイヌ文化成立の鍵を握る「異文化間交流」に着目した近年の研究に参与していくことができると考える。

本稿では，諸文化ごとの土器容量組成の様相を比較する中から，トビニタイ文化集団の日常的な生活形態の一端とその伝統性を明らかにするとともに，その主体的な動向を鮮明にする。土器型式研究で得られた成果を別の分析視点から照射し直すことで，筆者の主張を補強しつつ，「異文化間交流」の一端にアプローチする視座を提示することが最大の狙いである。

Ⅱ．当該期研究における土器の容量組成分析の意義

一般に，甕形土器などの煮炊き用土器の容量は，煮炊きの目的や内容物に規定される部分が大きく，その組成の変化が食生活の変化に密接に関連すると考えられている。この認識に立ち，縄文時代から弥生時代にかけての土器容量の変化から，水稲農耕をはじめとする新たな生業技術の導入の可能性を考察したり，大陸系文化が伝播するプロセスを地域ごとに把握する試みがなされている（小林 1995，佐藤 1999）。この種の研究が当該時期・地域の土器でなされたことはほとんどないが(1)，本研究の対象となる文化は出土する遺物が極めて限られているので，遺跡の立地や動植物遺存体を参考にした生業形態の解明には限界がある。このため，もっとも出土数が多い土器を分析することで当時の生活形態の一端にアプローチし，先学の見解と照らし合わせる意義は決して小さくないだろう。この認識のもとに，以下ではまず遺構一括出土土器の容量組成を検討し，トビニタイ式土器のそれがオホーツク・擦文両土器とどのような違いを見せるのか概観したうえで，上記の問題について考察していく。

第1表　編年表

擦文系統	オホーツク系統
（擦文前期）	藤本e群1類段階
	藤本e群2類段階
擦文中期	トビニタイ古式
擦文後期	トビニタイ新式
擦文晩期	

Ⅲ．分析の前提

Ⅲ－1．編年

貼付文系オホーツク土器とトビニタイ式土器の時期区分は，筆者の編年に準じる（榊田 2006・2007）[2]。すなわち，オホーツク文化期は藤本e群1類段階・e群2類段階，トビニタイ文化期はトビニタイ古式期（2段階前半・後半）・トビニタイ新式期である[3]。

擦文土器の編年は近年相当に細分が進み，多くの研究者による編年案が提示されているが（塚本 2002など），本稿ではトビニタイ文化と擦文文化の関係の解明を最大の眼目とするので，両者の共時性をもっとも把握しやすい宇田川洋（1980）による5期区分を採用する。

以上をまとめた編年表を第1表に載せる。トビニタイ新式が擦文文化のどの時期まで併行するか意見の分かれるところであるが，斜里町須藤遺跡や浜中町姉別川17遺跡，標津町古多糠川左岸竪穴群遺跡の各竪穴では晩期の擦文土器との共伴が認められることから（金盛ほか 1981，福士 1983，椙田 ほか1988），この時期まで残ることは確実であろう[4]。

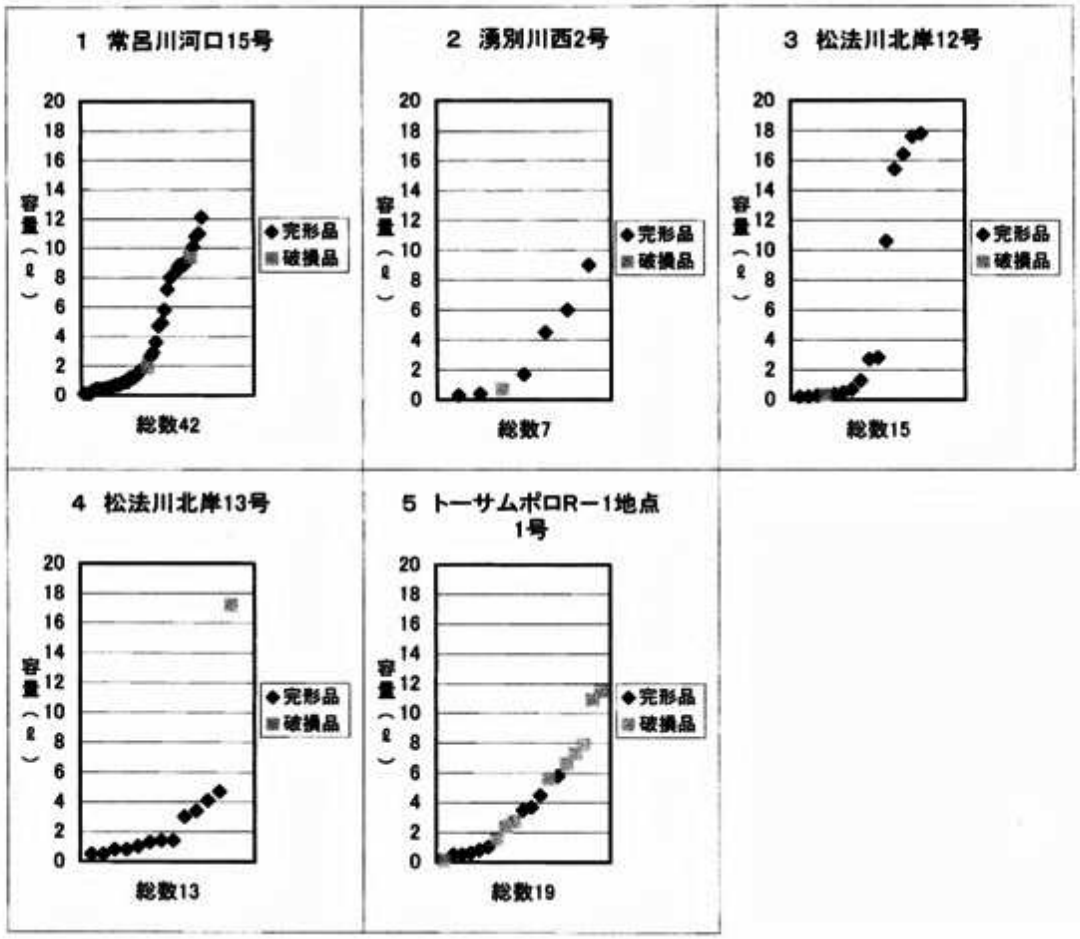
Ⅲ－2．資料の選定と分析方法

分析にあたり，出土状況の一括性が高く，日常的な土器組成をより忠実に反映していると考えられる住居床面出土土器のうち，完形か，底部あるいは口縁部のみが欠損しているものを対象とし，第1表に示した各文化の細別時期ごとに選定した。欠損資料は，欠損部の容量が1ℓ未満と考えられるもののみに限定した。原則として，上記の条件を満たす甕形土器が3点以上出土している遺構を対象に絞ったが，10点以上の一括出土例が各文化を通してわずかに見受けられる。このため，10点に満たない出土数の場合，日常生活単位の土器組成を厳密に反映していない可能性を考慮しなければならない。これによって生じる誤差を極力避けるため，各時期の対象遺構数を可能な限り多くした。各時期の選定資料は第2表のとおりである。なお，地域ごとの生態的条件によって異なる生業・生活形態をとっていたことも考えられ，遺跡ごとに独自の容量組成を示す可能性もある。この点で，オホーツク文化藤本e群2類段階の分析対象は一遺構しかなく，容量組成が単に地域差を反映しているに過ぎないおそれがある。この段階の遺跡は現時点では他に知られずやむを得ないので，分析結果はあくまで補完的に扱うにとどめることにする。

第2表　各遺構の帰属時期

オホーツク文化藤本e群1類段階	常呂川河口15号
	湧別川西2号
	松法川北岸12・13号
オホーツク文化藤本e群2類段階	トーサムポロR-1地点1号
トビニタイ古式期	オタフク岩第1地点2・4・7・9号
	トビニタイ2号
	船見町高台1号
	ピラガ丘第Ⅲ地点3号
	伊茶仁孵化場第一1号
トビニタイ新式期	須藤6・9・15・16・19・25・26・27・29号
	嘉多山3　3・5号
	当幌川左岸竪穴群試掘竪穴
道東擦文文化中期	岐阜第二8号
	嘉多山3　6号
道東擦文文化後期	岐阜第二2号
	史跡常呂1号
	常呂川河口43・84・139号
	広瀬2号
	幣舞2　2・3・8号
	下田ノ沢2号
道東擦文文化晩期	岐阜第二10イ・11上層・14・W4・W8号
	岐阜第三1・5号
	史跡常呂3号
	ライトコロ川口4号
	ライトコロ右岸10号
	ワッカ4号
	朝日トコロ貝塚Fトレンチ内竪穴
	栄浦第二1・2号
	栄浦第一30号
	常呂川河口7・9・63・122号
	豊里B号
	広瀬3号
	嘉多山2号
	オタモイ1 PIT 1 B
	西月ヶ丘1・7号
	幣舞2　22号
	北斗20・21・33号
	下仁々志別竪穴群B群4号
	十勝太若月16号

第3表　各遺構の土器容量組成グラフ①



容量の測定は，藤村東男による高さ1cmの円柱台の体積の総和を算出する方法を用いた（藤村1981）。資料の容量計測値や図版典拠は本稿末の第14～19表に載せているので，必要に応じて参照願いたい。

Ⅳ．オホーツク文化の土器容量組成

1．藤本e群1類段階（第3表グラフ1～4）

常呂川河口遺跡15号竪穴は焼失住居のため，土器のほか，石器・骨角器・鉄器・木器の遺存状況がきわめて良好で，当時の原位置を保ったまま住居が廃絶したと考えられ，オホーツク文化における住居内の空間利用や生活形態に関する貴重な情報を提供した例として，注目されてきた（武田編 1996）。土器その他の生活道具が住居内で一定の空間的まとまりを示していたことから，竪穴に居住した集団が数家族ないし数世帯から成り立っていたと考えられている（宇田川・武田1994，武田 1996）。出土土器点数は，オホーツク文化期の遺構の中では群を抜いて多く，40点以上

にもなる（グラフ1）。見ると，大小さまざまなサイズが存在しまとまりを把握しにくいが，4ℓ付近と7ℓ付近に容量の断絶を認めることができるだろうか。湧別川西遺跡2号竪穴では，出土点数に相当違いがあるが，この分化傾向を逸脱するものではない（グラフ2）。

次に，松法川北岸遺跡12・13号竪穴を見てみよう（グラフ3・4）。この遺跡も焼失住居で，多量の木製品を出土した遺構として著名である（涌坂ほか 1984）。両竪穴とも多少の攪乱を受けているものの，10点以上の完形土器が出土している。12号竪穴では，3ℓ未満・10ℓ付近・15ℓ以上の3クラスに容量が分化している。13号竪穴では10ℓクラスの容量が見られないが，住居が攪乱を受けている点を考慮するならば，たまたま欠落したものと判断することができるだろう。先の2遺跡の例とは若干様相が異なるようである。

2．藤本e群2類段階（第3表グラフ5）

住居の大半が攪乱により失われているので，実際の出土点数はさらに多かったと予想される。底部欠損例が多いが，出土した19点の資料を見ると，8ℓ付近に顕著な断絶がある。前段階との比較については後述する。

V．トビニタイ文化の土器容量組成

1．トビニタイ古式期（第4表グラフ6～13）

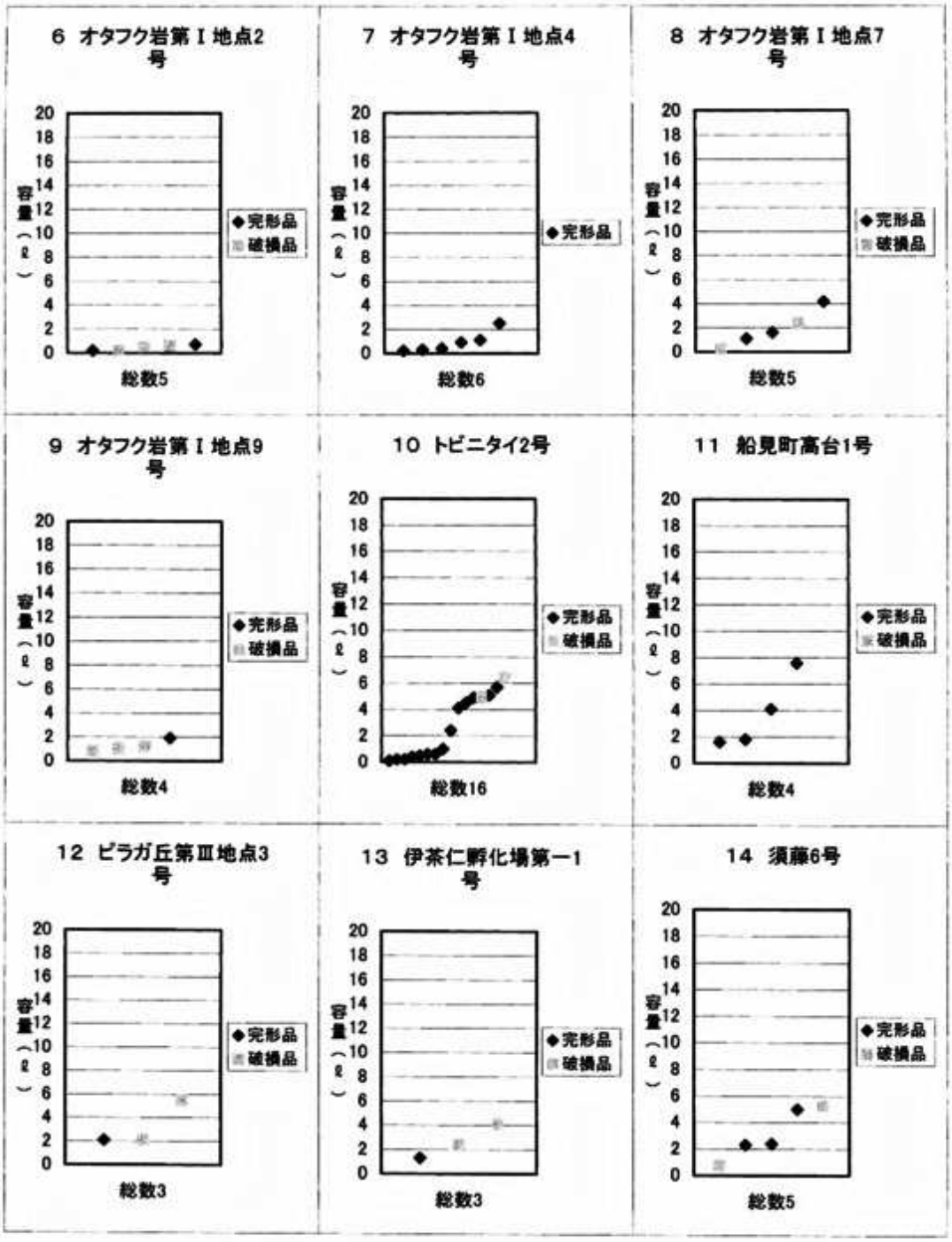
まず，一括出土した完形土器点数の多いトビニタイ遺跡2号例の様相を見てみよう（グラフ10）。全体の容量が少なく，断絶が2～3ℓ付近のみに認められる点など，明らかにオホーツク文化期と違いがある。船見町高台1号やピラガ丘第Ⅲ地点3号例は分析資料数こそ少ないが，この分化傾向を逸脱するものではない（グラフ11・12）。また，オタフク岩第Ⅰ地点例のように，明瞭な分化を示さない組成も見受けられる（グラフ6・9）

2．トビニタイ新式期（第4表グラフ14・第5表・第6表グラフ24～26）

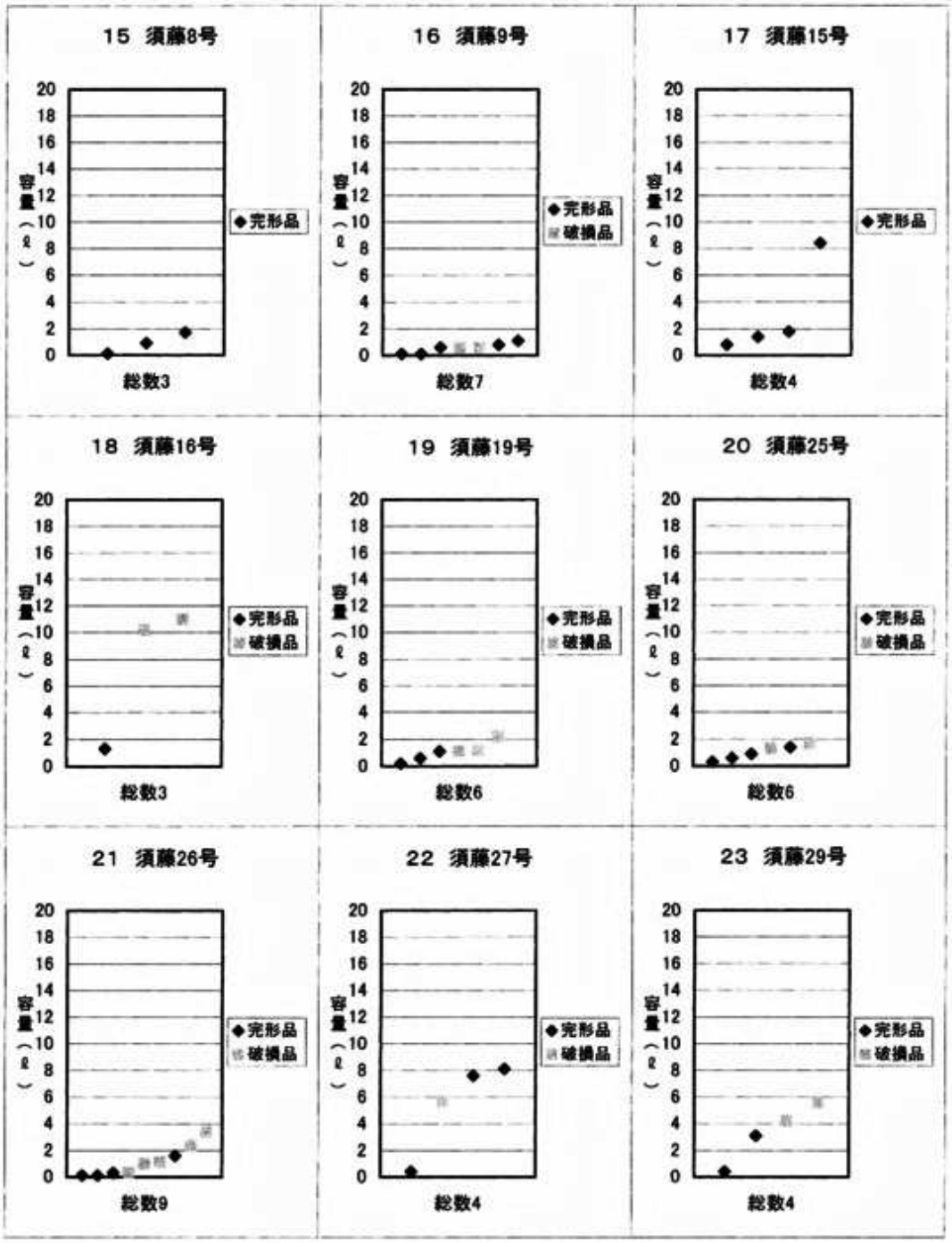
須藤遺跡の対象資料は，各竪穴で容量組成のバラつきが目立つ（グラフ14～23）。竪穴ごとに異なる調理形態をとっていたとは考えにくいことから，資料数の偏りによるゆがみが原因と思われる。ただ，8ℓを超える資料が見られることからも，容量は古式期よりもわずかに増えるようだ。

同じことは，当幌川左岸竪穴群遺跡・嘉多山3遺跡5号の資料についても言える（グラフ24・26）。後者では，20ℓ以上のサイズの出現が特異である。

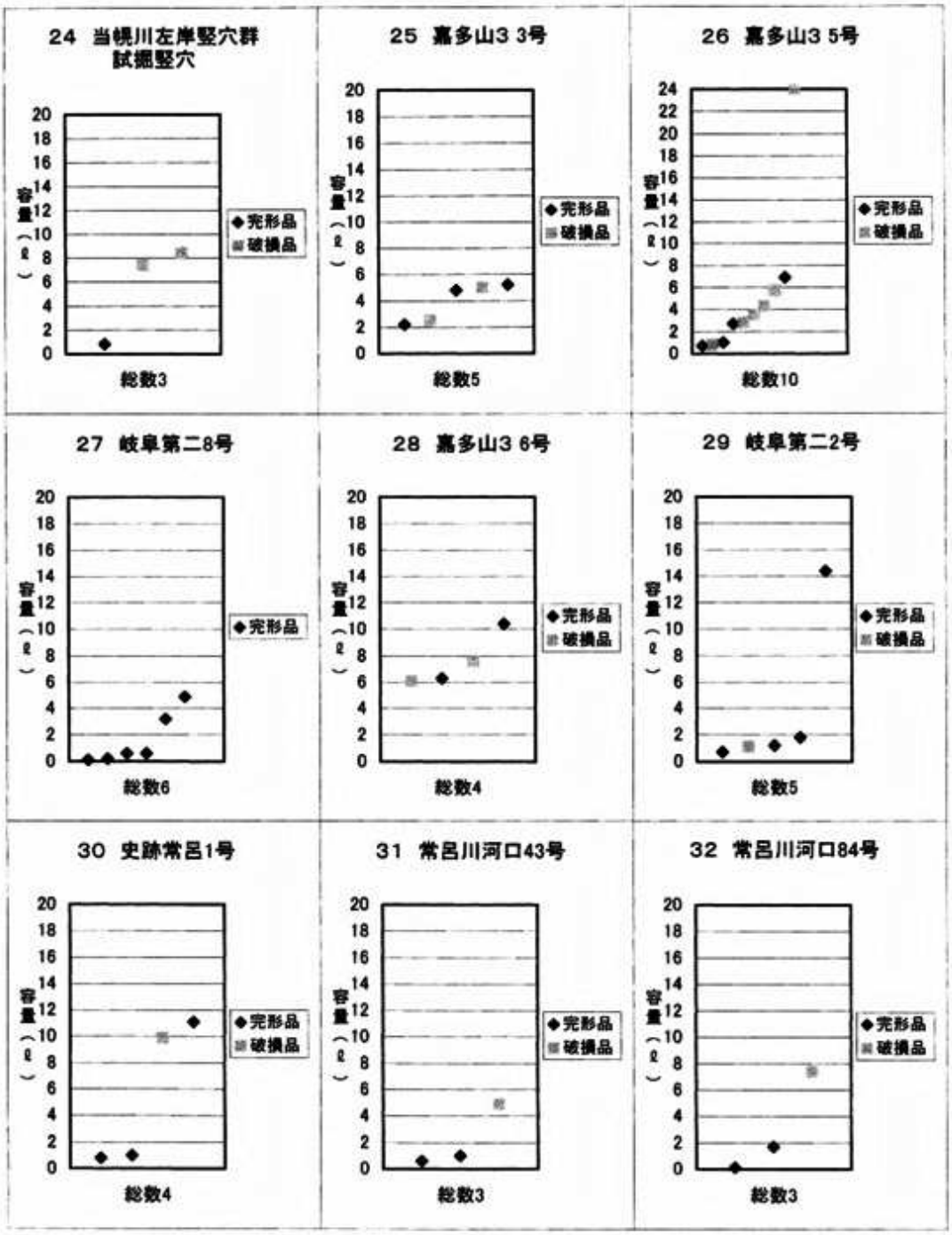
第4表　各遺構の土器容量組成グラフ②



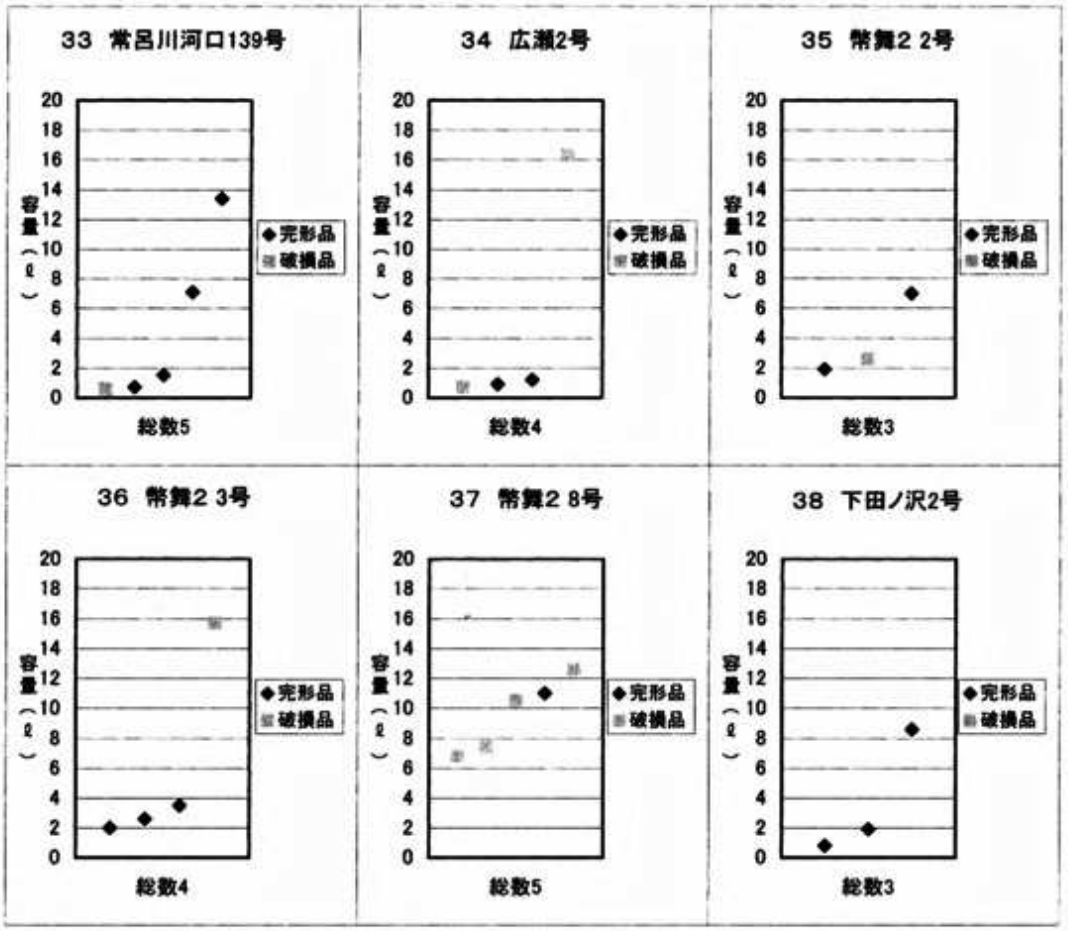
第5表　各遺構の土器容量組成グラフ③



第6表　各遺構の土器容量組成グラフ④



第7表　各遺構の土器容量組成グラフ⑤



VI. 道東部擦文文化の土器容量組成

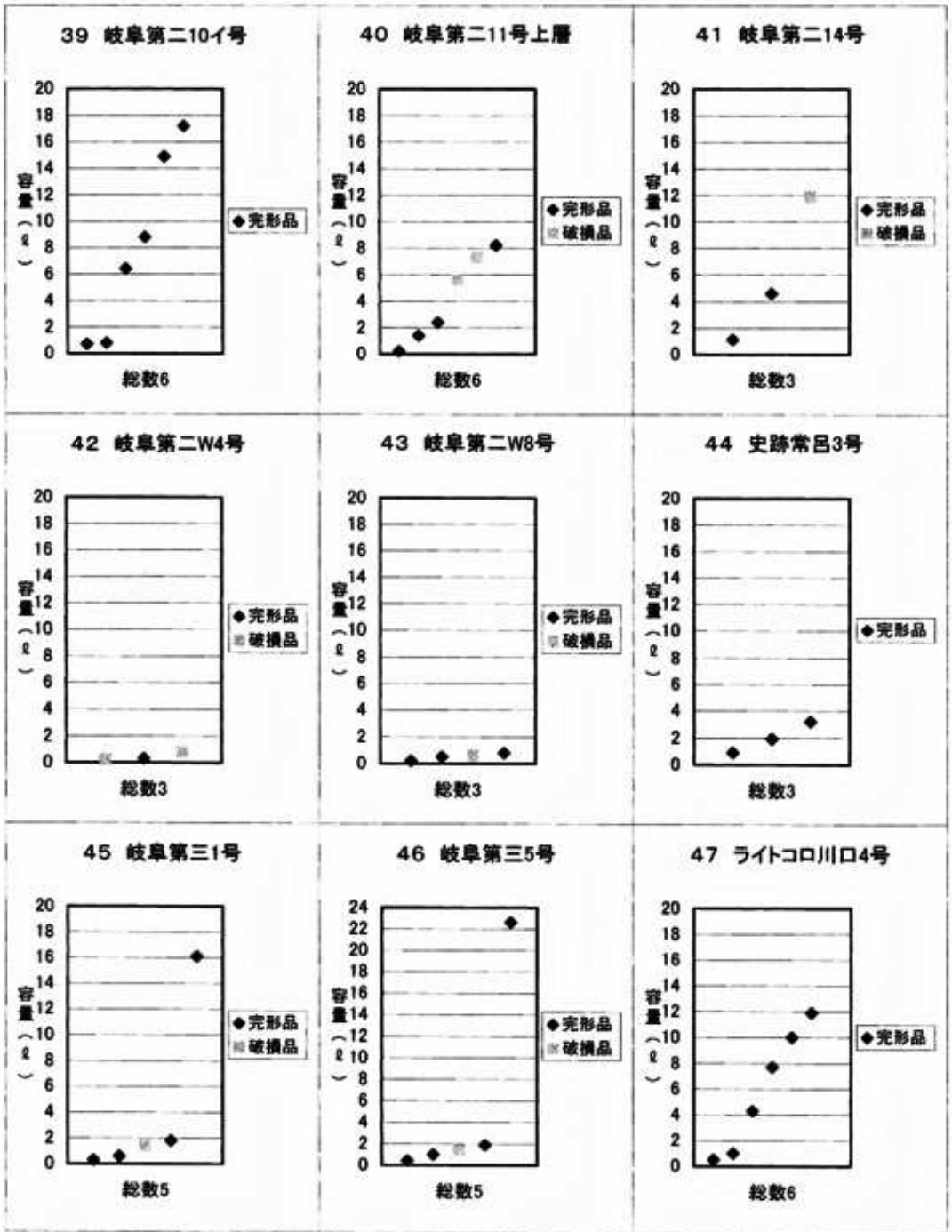
1．中期（第6表グラフ27・28）

道東部における当該期の遺構例は非常に少ない。完形土器を比較的多く出土した遺構も2例しか存在しなかったので，後節で後期・晩期との総体的な比較をする中から予備的な考察をおこないたい。

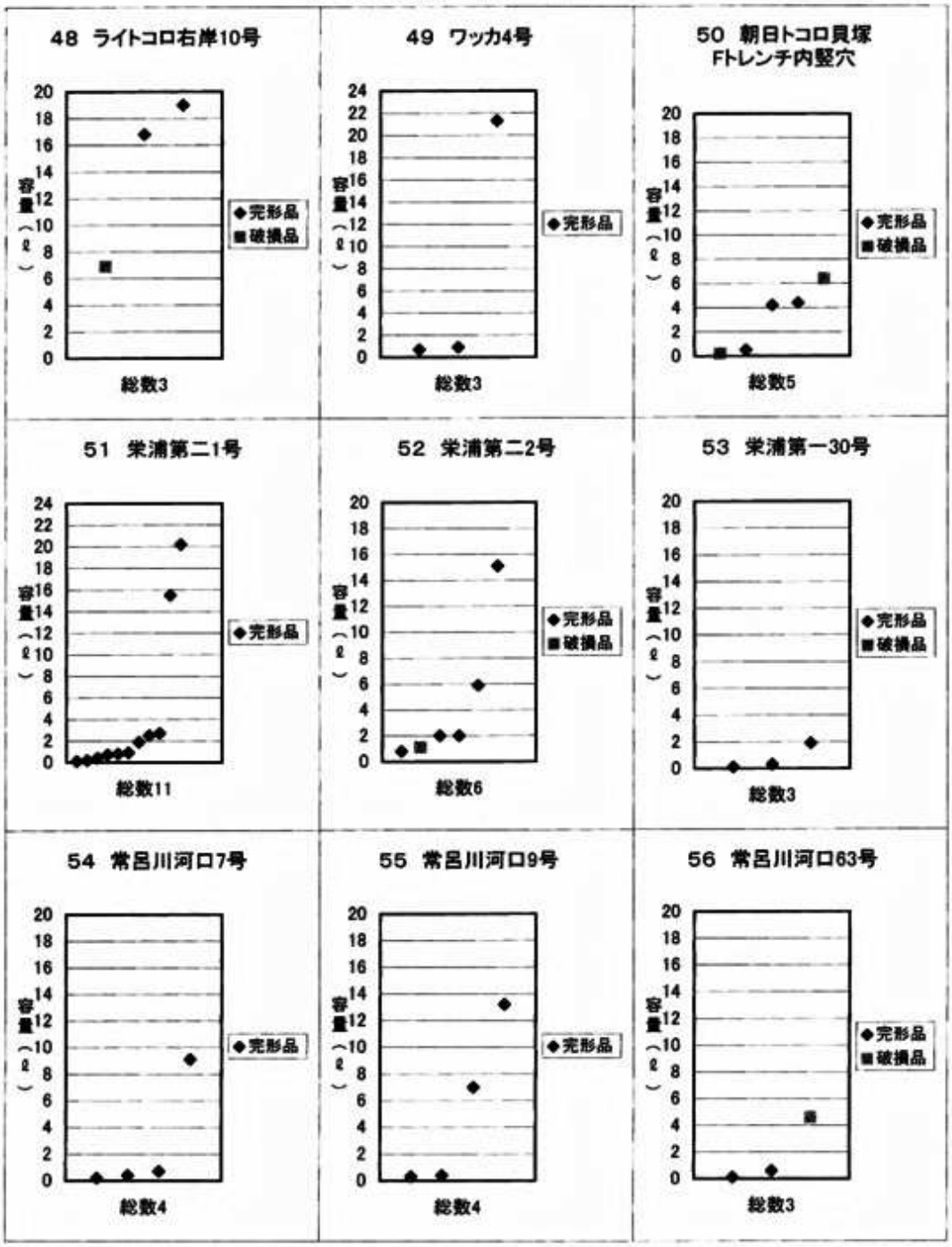
2．後期（第6表グラフ29～32・第7表）

遺構ごとのバラつきが目立つが，併行するトビニタイ文化に比べ容量の分化が顕著である。特に，2ℓ未満と10ℓ以上の2クラスの分化が際立っている（グラフ29・30・34・36）。ただし，常呂川河口遺跡139号では6ℓ以上8ℓ未満のサイズが加わり分化が3クラスとなっており（グラフ33），幣舞2遺跡8号でも同様のサイズが見受けられる（グラフ37）。

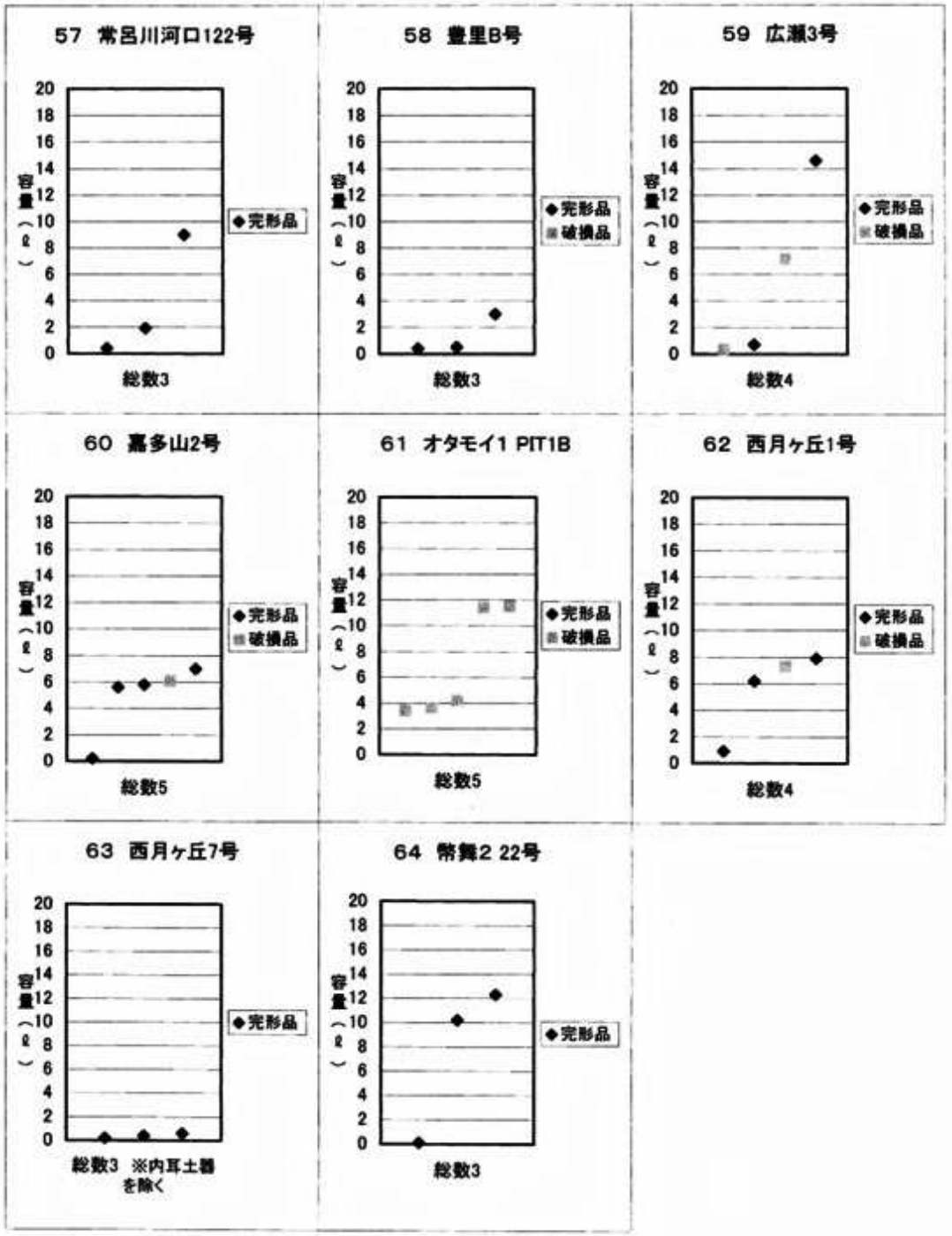
第8表　各遺構の土器容量組成グラフ⑥



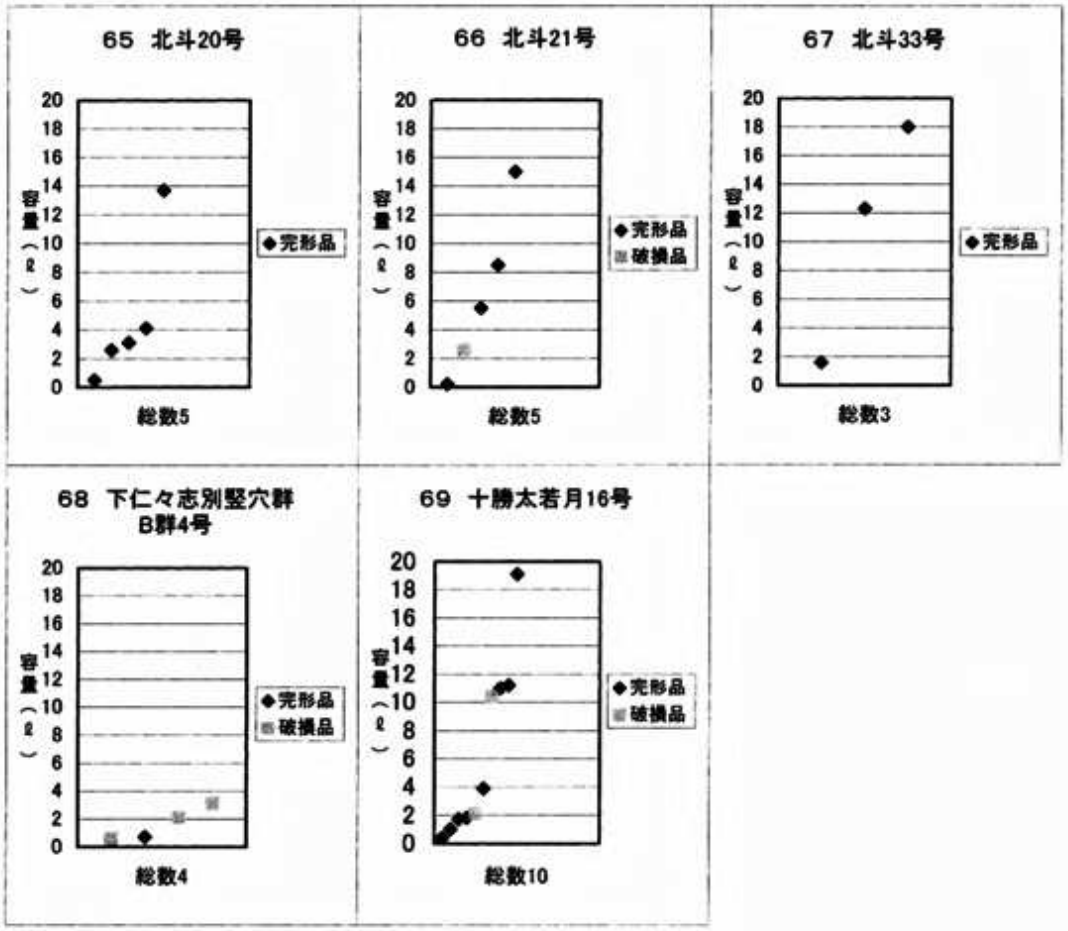
第9表　各遺構の土器容量組成グラフ⑦



第10表　各遺構の土器容量組成グラフ⑧



第11表　各遺構の土器容量組成グラフ⑨



3．晩期（第8表～第11表）

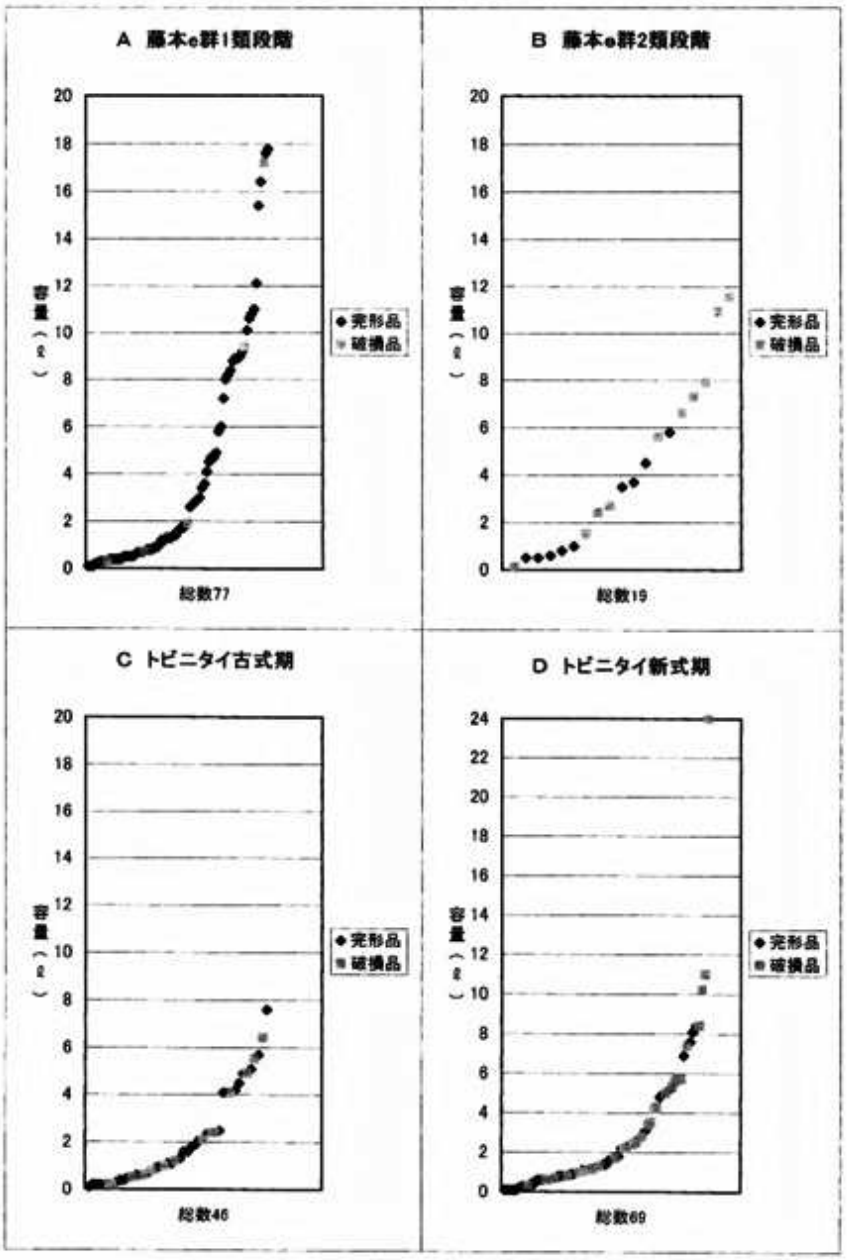
一括出土状況が良好な，栄浦第二遺跡1号，十勝太若月遺跡16号例が参考になる（グラフ51・69）。見ると，4ℓ未満・14ℓ以上の2クラスの大きな分化が見られる。後者では，4ℓ未満・10ℓ以上12ℓ未満・14ℓ以上の3つのクラスに分化している。

他の遺構では，岐阜第二遺跡10イ号・栄浦第二2号・広瀬3号例が，分化の程度をよく示している（グラフ39・52・59）。やはり4ℓ未満・14ℓ以上のサイズのほか，6ℓ以上9ℓ未満のまとまりが見受けられる。これらのような容量クラスのまとまりは，その他の遺構でもよく確認されるので（グラフ40・47・55・61・65・66），当該期において普遍的であったと言えよう。

Ⅶ．各文化期の様相と考察

以上，遺構単位の土器容量組成の様相を時期別に概観した。これらをまとめ，細別時期単位で土器容量組成を示したのが第12・13表である。本節では，この表を参照しながら諸文化の様相を

第12表　時期ごとの土器容量組成グラフ①

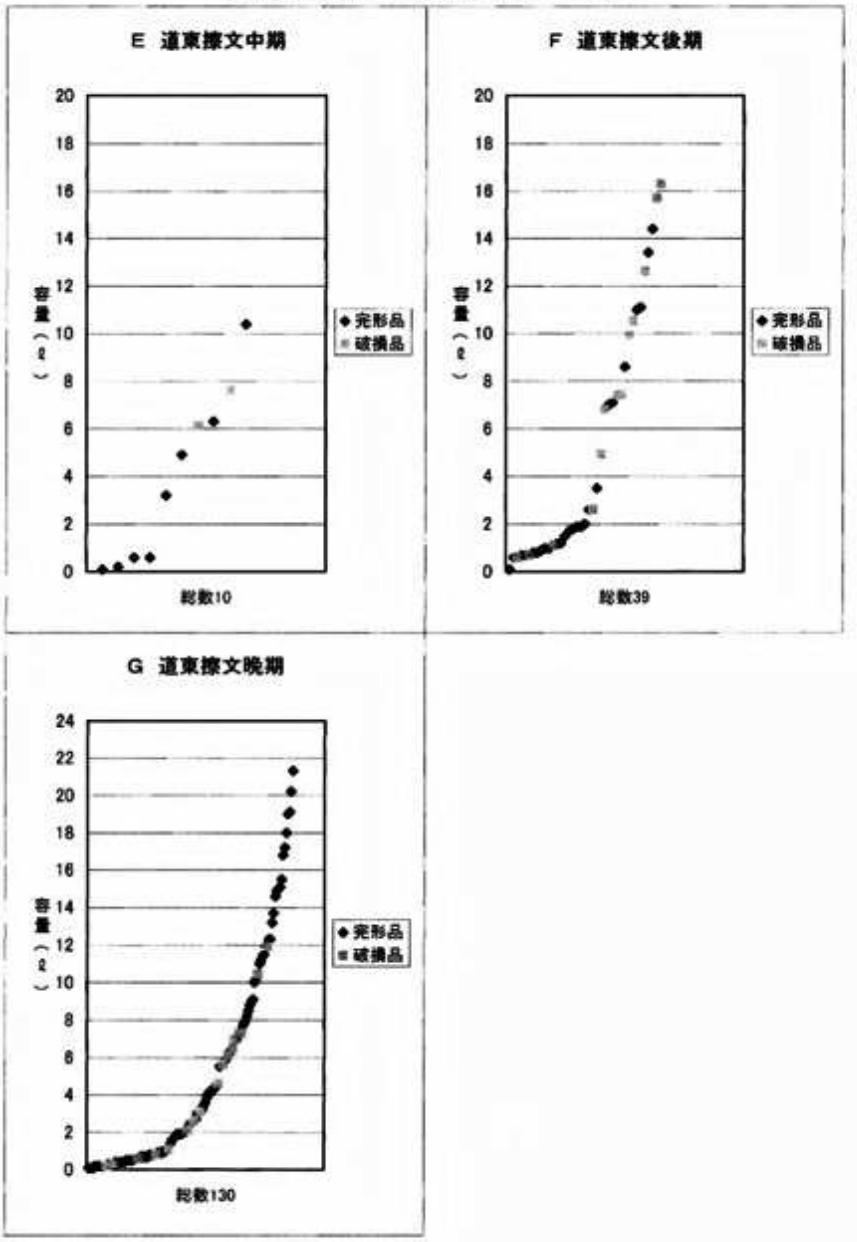


概観し，その特質を述べていきたい。なお，これまで見てきたように，個々の遺構同士では容量組成にバラつきが見られ，時期ごとにまとまらないのが実態であるが、ここでは遺構ごとの性格の違いについては考慮していない。

1．オホーツク文化の様相（第12表グラフA・B）

e群1類段階では，2ℓ未満・2ℓ以上5ℓ未満・6ℓ付近・8ℓ以上10ℓ未満・10ℓ～12ℓ

第13表　時期ごとの土器容量組成グラフ②



付近・15ℓ以上の6クラスの大きな分化が認められ，より細かい断絶も観察される。ただし，先に見た遺跡ごとの差異を考慮するならば，e群1類段階すべての遺構がこのような容量分化を示すとは限らない。地域性の問題も考慮しながら再度検討する必要があるだろう[15]。e群2類段階では大型土器がないなど違いは見られるものの1類段階の分化傾向を大きく逸脱するものではないと思われる。良好な一括資料の増加を待ちたい。

2．トビニタイ文化の様相（第12表グラフC・D）

古式・新式ともに，4ℓ以上・未満と6ℓ以上・未満での分化が認められる。容量組成の通時的なつながりを示しており注目されよう。ただし，土器の大型化も加わることで，新式期のほうが分化の度合いは大きくなるようだ。

また，特筆すべきは，オホーツク文化期からの通時的変化として，土器容量が全体的に小型化することである。トビニタイ文化の成立に擦文文化が何らかの形で関わっていると考えられる以上，この変化の背後に擦文文化からの生業・生活形態上の影響が存在した可能性を念頭におくべきだろう[6]。

3．道東部擦文文化の様相（第13表）

晩期では，5ℓ付近・9ℓ付近・13ℓ付近・16ℓ付近に大きな断絶があり，5クラスの分化が認められる（グラフG）。資料数は圧倒的に少ないが，後期の様相も巨視的に見ればこの分化傾向を逸脱するものではないだろう（グラフF）。晩期では16ℓを越す特大型が一定量を占め，容量の分化や大型化がさらに進むものの，両時期では概して容量組成上のつながりが強いといえる。

改めて中期の容量組成を見てみると，容量の分化などの点で後期の容量組成につながる様相を見て取れる（グラフE）。資料が少ないため断定はできないが，現時点では中期と後期の容量組成上の隔たりはないものと考えておきたい。

4．考　察

オホーツク文化期藤本e群1類段階内での差異，トビニタイ古式期から新式期にかけての容量の大型化，擦文文化期をとおして進行する容量の大型化など，各文化では若干の相違が観察されるが，基本的に同じ文化内で顕著な通時的変化は見出されない。土器容量が煮炊きの目的や調理内容物に規定されているとの前提に立つならば，調理などの消費段階での使用法を見込んだ土器製作時の規範のようなものが，文化ごとに独自に存在していたことを示すものとして注目できるだろう。

Ⅷ．通文化的にみた容量組成の違い

1．容量組成上の画期とトビニタイ文化の独自性

各文化の細別時期ごとに容量組成を概観した結果，同一文化内では通時的なつながりがそれぞれ確認された。その一方で，異文化間では顕著な違いが存在している。それは，

①．オホーツク文化期からトビニタイ文化期にかけての土器容量の小型化
②．トビニタイ古式期と擦文中期での容量組成上の差異

③．トビニタイ新式期と擦文後・晩期での容量組成上の差異

の3点にまとめられるだろう。

①の問題について，擦文文化の生業・生活形態の影響の存在が示唆されたが，トビニタイ古式期の土器容量組成は隣接する擦文文化とはまったく異なることから，トビニタイ文化集団は擦文文化集団とも異なる生業・生活形態をとっていたと考えられる。すなわち，擦文文化の影響でオホーツク文化期の容量組成が著しく変化することはあっても，擦文文化の生業・生活形態をそのまま取り入れたわけではなかったのである。このことは，トビニタイ文化の生業面・日常調理形態の面等での独自性を示すものにほかならず，考古学的文化の一要素として認定すべきものはないだろうか。山浦清や澤井玄は，この時期の土器・土器組成をオホーツク文化と見なしているが（山浦 1983，澤井 1992），以上の見解を是認する限り，擦文文化ともオホーツク文化とも違うトビニタイ文化独自の容量組成として認識すべきだと筆者は考える。

なお，遺跡立地と遺物組成を検討した大西秀之は，トビニタイ文化の生業はオホーツク文化の系譜上に位置づけられると評価している（大西 2001）。しかし，オホーツク文化期に普遍的に見られた網漁用大型石錘の消失や，内水面漁労を意識した立地の選択などは，かつて藤本強（1979b）が指摘したように「オホーツク文化の生計システムの崩壊」を端的に示しているだろう。そうだとすれば，オホーツク文化との生業上のつながりを単線的に捉えるのは果たして妥当だろうか。確かに，氏のように各遺物を個別に列挙し比較するだけならば，オホーツク文化との共通性が目立つ。しかし，個々の遺物は文化を構成する様々なシステムとの関連の中で独自の機能を有していたと推察され，文化ごとの生態的・社会的脈絡と切り離してその機能を考えることはできないであろう。そして，トビニタイ文化期における遺跡立地の多様化，竪穴住居の小型化，擦文文化との関係の強化，屋内骨塚や動物意匠遺物の消滅に象徴されるように，集団を取り巻く生態系や社会システム，観念システムがオホーツク文化から大きく変質したと考えられる以上，総体としてのシステムから切り離された個々の遺物の共通性のみを生業上のつながりの根拠にすることはできないであろう。本稿ではその他の生業関連遺物に言及する余裕はないが，ここで見たトビニタイ文化独自の容量組成を，オホーツク文化の生業形態との相違を物語るひとつの要素として位置づけたい。すなわち，擦文文化からの何らかの影響を受けたことによりオホーツク文化の生計システムが変化，トビニタイ文化独自の生計システムが新たに構築されたことを，土器容量組成の変化が端的に示しているものと捉えておきたい。

2．容量組成にみるトビニタイ文化集団の主体性

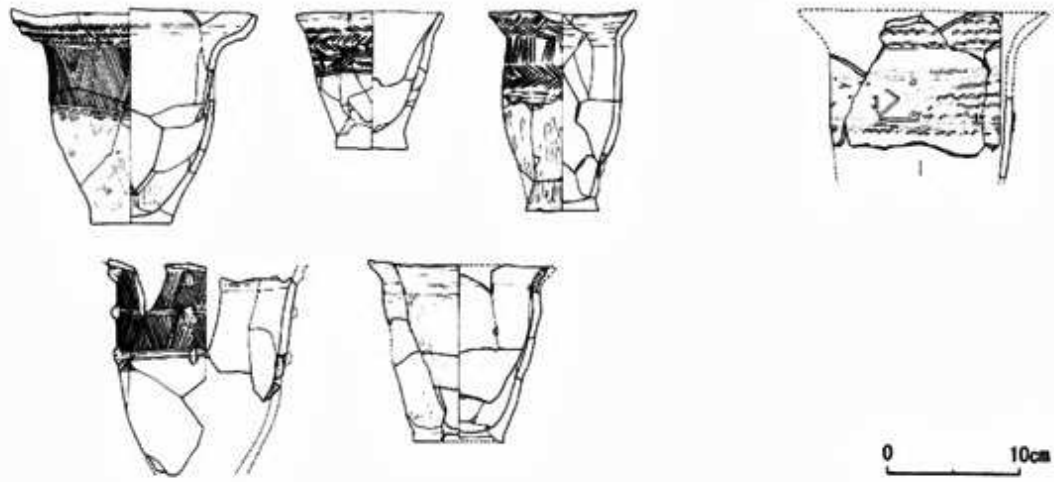
トビニタイ古式期に成立した独自の容量組成は，次の新式期になっても受け継がれていく。擦文文化集団の道東部への大掛かりな進出・移住が始まることに関連すると思われるが（大井 1970，山浦 1983），トビニタイ新式期になると，同じ住居内での擦文土器とトビニタイ式土器の共伴例が

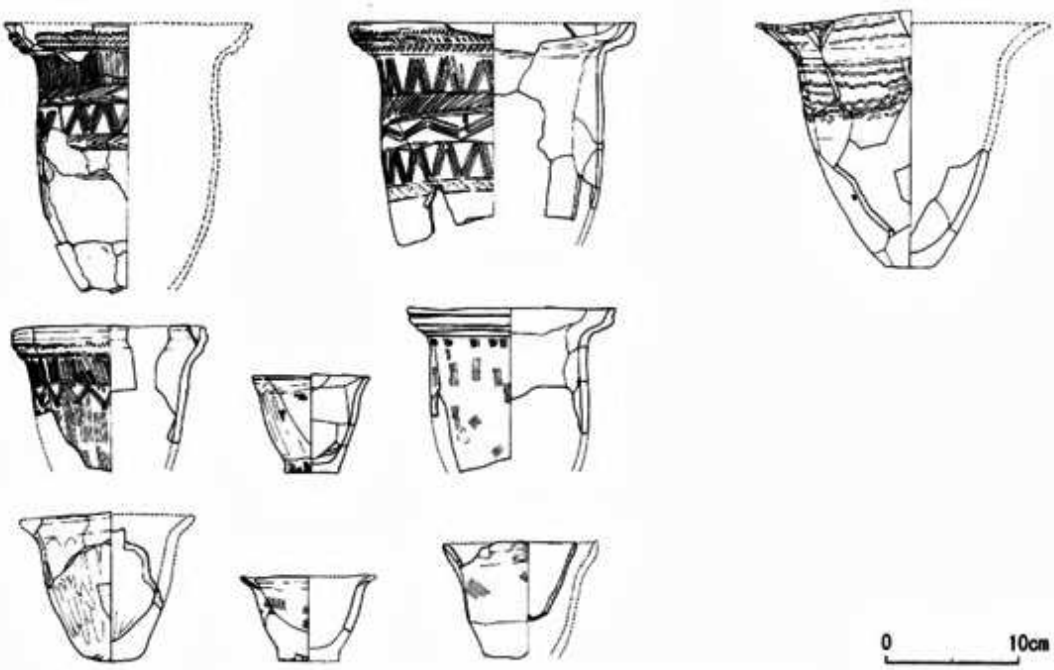
増え，器種組成上同一のセットを形成するようになる（第2図）。しかし，トビニタイ新式土器を出土する遺構における土器容量組成の前段階とのつながりは先に述べたとおりであり，擦文文化の影響がより強まったとはいえ，生業や日常の調理形態などに大きな変化はなかったと考えられる。

ここで注目すべきは，トビニタイ式土器に共伴する擦文土器の容量組成が，擦文土器のみを出土する遺構の容量組成とまったく異なるという点である。具体的には，併行する擦文文化後・晩期では，10ℓ以上のサイズの土器が組成の一部をなすのが普通で，顕著な容量分化が起こっているのに対し（第13表グラフF・G），トビニタイ式土器に共伴する擦文土器にはこのようなサイズの土器も，容量の顕著な分化も確認されないのである（第12表グラフD）。すなわち，土器の型式学的視点から見れば擦文土器であっても，日常の使用形態という視点から見れば，それはトビニタイ文化の系譜上に位置づけられるのである。従来のトビニタイ文化研究では，型式組成に占めるトビニタイ式土器の割合の通時的な減少がひとつの決め手となり，擦文文化に吸収される受身の存在としての側面が強調されてきた感がある。しかし，本稿での分析結果は，少なくとも土器研究に関する限り，可視的に認知される外来型式分布の濃淡だけでは外来文化の影響を読み取れないことを物語る[7]。

ところで，以上のようなトビニタイ新式期の各住居での事例は，土器組成のうちトビニタイ式土器あるいは擦文土器のどちらかが欠落しても，通常の擦文文化での容量組成を充足することができない状況を反映している。すなわち，２つの型式系統の土器が１つの日常調理具の単位として確立されているのである。それぞれの系統の土器が，まったく別の遺跡で製作され，使用時においてのみ同時に使われるというような状況は考えにくいことから，１つの遺跡に居住する集団が２つの土器製作伝統を保有し，作り分けながらも同時に使用していたか，あるいは異なる文化的出自の製作者が同居し，共に土器を製作・使用していたと考えることができる[8]。そして，このような状況はまさに両文化の同化過程を反映していると評価できるであろう。

また，擦文文化集団が一方的にトビニタイ文化集団の集落に進出し吸収していったならば，トビニタイ文化集落に現れる土器容量組成は擦文文化集落のそれと同じ様相を呈するはずである。したがって，トビニタイ新式期に見られる上記のような状況は，「自らの伝統的な使用形態を維持しつつ異文化の擦文土器を取り入れる」という新たな土器使用をめぐるシステムが，日常生活上の局面で構築されたことを反映していると考えることができるだろう。そしてその背後には，トビニタイ文化集団の自律的・主体的な働きかけにもとづく，擦文文化集団との日常生活レベルでの交流を想定せざるをえないのである。





第2図　トビニタイ新式期における住居一括出土土器の組成
上段：須藤遺跡25号　下段：須藤遺跡26号
※高坏形土器は除外している

おわりに

トビニタイ文化の土器容量組成は，オホーツク文化にも擦文文化にもない独自の様相を呈する。そしてそれは，擦文文化の影響が時間とともに強くなってきても脈々と維持され続けるだけでなく，異文化である擦文文化の土器を取り込みつつ自らの容量組成の伝統に置き換えて使用するようにすらなるのである。このように，トビニタイ文化には明瞭な独自性・主体性が見受けられ，「一方的に吸収されていく」とする見方は「異文化の融合」という事態の一面的な解釈にすぎないことが理解される。オホーツク文化の系統を汲む要素が時間とともに可視的に確認されなくなることは，すでに当該期研究の初期から指摘されてきたが，問題は，この視覚的には消滅してしまうという事実をどのように解釈するかにかかっていよう。集団が同化していく過程にアプローチするためには，「一方から他方への影響」ではなく「相互の主体的動向」を視野に収めた分析視点が常に必要となることを強調しておきたい。

本稿では，土器容量組成の通文化的比較を通じた文化や集団関係の基礎的把握を重視した。そのため，容量の分化が何に規定されているのか，なぜ土器が小型化あるいは大型化するのか，サイズごとの機能の違いはあるのか，各文化の土器容量組成がもつ意味の考察にまで踏み込むことができなかった。また，土器の機能を考えるうえで看過できない器種組成の問題についても検討から除外している。トビニタイ新式期には，煮沸用の甕のみでなく高坏をも擦文文化から取り入れており，その理由を突き詰めていくことも当該期の集団関係を探るうえで必要となってこよう。今後の課題としたい。

本稿は，2007年に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した修士論文の一部に，同年２月10日に第８回北アジア調査研究報告会（会場：東京大学）においておこなった研究発表（タイトル同名）の内容を加え，修正したものである。その後，分析資料数を大幅に増やしたため，先の発表内容と若干の違いがあることをお断りしておきたい。

本稿を草するにあたり，審査をしてくださった熊木俊朗・今村啓爾・大貫静夫・佐藤宏之諸先生を始め，福田正宏・高橋　健・笹田朋孝・根岸　洋・井出靖夫・山口欧史・森本幹彦・森　岬子の各氏からは，数々の貴重なご助言と叱咤激励のお言葉を頂戴した。また，以下の諸氏・諸機関からは，資料閲覧の際にひとかたならぬご高配を賜った。末筆ながら，深く感謝申し上げます。

石川　朗，梅田広大，大橋秀規，加藤春雄，合地信生，後藤秀彦，椙田光明，武田　修，松田功，松田　猛，門間　勇，山田　哲，米村　衛，涌坂周一，和田英昭（五十音順・敬称略）

網走市教育委員会，浦幌町立博物館，釧路市埋蔵文化財調査センター，標津町ポー川史跡自然公園，斜里町教育委員会，端野町歴史民俗資料館，常呂町教育委員会，羅臼町公民館（五十音順）

註

（1）わずかに，宇田川洋による擦文文化期の北見市栄浦第二遺跡・浦幌町十勝太若月遺跡の竪穴出土土器のセットの概観（宇田川 1988・1995），武田修らによるオホーツク文化期の北見市常呂川河口遺跡15号竪穴一括出土土器の大きさと出土位置の検討をもとに，複数家族の同居の可能性を論じた研究（宇田川・武田 1994，武田 1996）があるのみで，文化内の通時的変遷の把握や通文化的比較はなされたことがない。

（2）近年常呂川河口遺跡15号竪穴で藤本強（1965）のオホーツク土器編年におけるｄ群とｅ群が共伴することが指摘され，両者の型式細別が疑問視されている（大井 2004）。筆者の貼付文系オホーツク土器の分類（榊田 2006）は基本的に藤本強の編年を踏襲しているため，資料の実態に即していないという意味で問題を残していると言える。しかし，本稿でｅ群1類段階とした遺構ではすべて常呂川河口15号と同じくｄ群とｅ群が混在しているので，同じ「段階」として括ることに問題はないと考える。筆者自身，ｄ群からｅ群にかけての時期区分を明確に示す案を現段階では持ちあわせておらず，「ｅ群」の名を段階に付与しているのはあくまで便宜的なものであることをお断りしておきたい。

（3）トビニタイ古式1類（1段階）の良好な一括資料は現状では見られないので，分析対象から除外する。後述する前期擦文土器も同様である。

（4）併行する擦文土器が少なくとも2段階に分けられる以上，トビニタイ新式も2段階に細分されるのが望ましいが，資料数が少ない現状では困難である。

（5）常呂川河口15号例では，松法川北岸例と異なり各容量の変異が漸次的である（第3表グラフ1・3・4）。これは，複数のスペースでまとまった各土器群の容量組成を住居単位でまとめて割り出したことにより，本来各スペース単位の容量組成に示されるはずの容量の分化（宇田川・武田 1994，武田 1996）が目立たなくなったことによると考えられる。仮に分化を示す容量組成を，一世帯の必要最低限の日常調理具の反映と捉えるならば，常呂川河口例での「住居内の各スペース単位で示される容量分化」と松法川北岸例での「一住居単位で示される容量分化」という違いは，食生活形態の違いよりも家族・世帯など居住者の構成の違いに関連している可能性が強い。本稿では，トビニタイ文化との関連を分析する都合上オホーツク文化諸遺跡の土器容量組成を一括しているが，上記の問題は，土器容量組成分析が食生活形態のみならず世帯構成の復元にもアプローチし得る可能性を示しており，留意しておきたい点である。

（6）擦文文化に関わりなく，オホーツク文化集団が自発的に容量の小型化を選んだという可能性もないわけではない。しかし，土器の文様構成のみならず，機能・用途に直結する器形にまで擦文土器の影響が明瞭に観察されること，擦文土器の共伴例が増えることなどを考慮するならば，容量の小型化には，やはり何らかの形で擦文文化の影響が絡んでいたと考えるのが合理的だろう。

（7）同様の問題は，佐藤由紀男によっても提起されている。氏は，本州島北部の縄文晩期～弥生時代に至る時期の土器容量組成の変遷を分析し，外来要素である「遠賀川系文化」の波及状況を地域ごとに概観する中で，「遠賀川系文化」の受容によって「類遠賀川系土器」という独自の型式学的特徴を示す土器が新たに生み出され，地域ごとにその多寡が認められる一方で，容量組成の面では全地域で「遠賀川系文化」の影響を反映する容量の小型化が認められることから，「類遠賀川系土器」の型式学的受容の有無のみが「遠賀川系文化」の影響を反映するものではない，と注意を喚起している（佐藤 2002：pp. 5～6）。

（8）異系統の土器が同じ集落ないし住居から出土する状況に対し，複数の文化集団による「一所共住」を想定する多くの考えは，小杉康によって紹介されている（小杉 1995）。

引用文献

青柳文吉編　1995『湧別町川西遺跡』　北海道立北方民族博物館

石川　朗　2005『釧路市幣舞２遺跡調査報告書Ⅰ』釧路市埋蔵文化財調査センター

石川　朗・松田　猛編　1992『釧路市北斗遺跡Ⅱ』釧路市教育委員会

石川　朗・松田　猛編　1993『釧路市北斗遺跡Ⅲ』釧路市教育委員会

石橋次雄・木村方一・後藤秀彦　1974『十勝太若月－第二次発掘調査－』浦幌町教育委員会

宇田川洋　1988『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター

宇田川洋　1989「動物意匠遺物とアイヌの動物信仰」『東京大学考古学研究室研究紀要』第８号 pp. 1-42

宇田川洋　1995『北海道の考古学』北方新書001

宇田川洋・武田　修　1994「常呂川河口遺跡15号竪穴住居出土の土器群」『考古学ジャーナル』 371 pp. 22-26

大井晴男　1970「擦文文化とオホーツク文化の関係について」『北方文化研究』第10号 pp. 21-70

大井晴男　2004b「'貼付文系オホーツク土器群' の '型式論' 的変遷を考える」『北海道考古学』第40輯 pp. 167-184

大西秀之　2001「"トビニタイ文化" なる現象の追究」『物質文化』71 pp. 22-56

大西秀之　2003「境界の村の居住者－ "トビニタイ文化" 集落における居住者の出自と世帯構成－」『日本考古学』第16号 pp. 157-177

大場利夫・奥田　寛　1960『女満別遺跡』女満別町・教育委員会・郷土保勝会

加藤晋平・菊池徹夫・宇田川洋・佐藤隆広　1982『広瀬遺跡』常呂川流域史研究会

河野本道・川上　淳編　1983「根室市西月ヶ丘遺跡発掘調査報告書」『駒沢大学北海道教養部考古学研究会紀要』第３集 根室市教育委員会

小杉　康　1995「土器型式と土器様式」『駿台史学』第94号 pp. 58-129

小林正史　1995「縄文から弥生への煮沸用土器の容量組成の変化」『北陸古代土器研究』第５号 pp. 110-130

駒井和愛編　1963・1964『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（上）（下）』　東京大学文学部

榊田朋広　2006「トビニタイ式土器における文様構成の系統と変遷」『物質文化』81 pp. 51-72

榊田朋広　2007「異系統土器論からみたトビニタイ式土器と擦文土器の型式間交渉と動態」『物質文化』pp. 43-69

佐藤由紀男　1999『縄文弥生移行期の土器と石器』雄山閣

佐藤由紀男　2002「煮炊き用土器の容量変化からみた本州北部の縄文／弥生」『日本考古学』第13号 pp. 1-18

澤　四郎　1972『北海道厚岸町下田ノ沢遺跡』　厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会

澤　四郎ほか　1971『羅臼』羅臼町教育委員会

澤井　玄　1992「「トビニタイ土器群」の分布とその意義」『古代』第93号 pp. 128-151

椙田光明　1980『標津の竪穴Ⅲ』標津町教育委員会

椙田光明・椙田美枝子　1987『標津の竪穴Ｘ』標津町教育委員会

椙田光明・椙田美枝子　1988『標津の竪穴XI』標津町教育委員会

武田　修　1992『史跡常呂遺跡』常呂町教育委員会

武田　修　1996「オホーツク文化竪穴住居内の遺物出土パターンについて－常呂川河口遺跡15号竪穴を中心として－」『古代文化』第48巻第６号 pp. 3-13

武田　修編　1996『常呂川河口遺跡（１）』常呂町教育委員会

武田　修編　2000『常呂川河口遺跡（２）』常呂町教育委員会

武田　修編　2002『常呂川河口遺跡（３）』常呂町教育委員会

武田　修編　2004『常呂川河口遺跡（4）』常呂町教育委員会

武田　修編　2005『常呂川河口遺跡（5）』常呂町教育委員会

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部編　1995『ライトコロ右岸遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

東京大学文学部編　1972『常呂』東京大学文学部

東京大学文学部編　1977『岐阜第三遺跡』東京大学文学部

東京大学文学部編　1980『ライトコロ川口遺跡』東京大学文学部

西　幸隆・松田　猛　1983『下仁々志別竪穴群』阿寒町教育委員会

福士廣志　1983『姉別川17遺跡発掘調査報告』浜中町教育委員会

藤村東男　1981「土器容量の測定」『考古学研究』第28巻第3号 pp. 106-117

藤本　強　1965「オホーツク土器について」『考古学雑誌』第51巻4号 pp. 28-44

藤本　強　1979a『北辺の遺跡』教育社

藤本　強　1979b「トビニタイ文化の遺跡立地」『北海道考古学』第15輯 pp. 23-34

本田克代・豊原熙司・涌坂周一　1980『船見町高台遺跡』羅臼町教育委員会

前田　潮・山浦清編　2004『根室市トーサムポロ遺跡R－1地点の発掘調査報告書－オホーツク文化末期の竪穴群－』北地文化研究会

松田　功ほか　1993『オショコマナイ河口東遺跡・オタモイ1遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会

山浦　清　1983「オホーツク文化の終焉と擦文文化」『東京大学考古学研究室研究紀要』第2号 pp. 157-179

八幡一郎ほか　1966『北海道根室の先史遺跡』根室市教育委員会

米村哲英・金盛典夫　1976『ピラガ丘遺跡－第III地点発掘調査報告－』斜里町教育委員会

涌坂周一ほか　1984『松法川北岸遺跡』羅臼町教育委員会

涌坂周一ほか　1991『オタフク岩遺跡』羅臼町教育委員会

渡辺　仁　1974「アイヌ文化の源流－特にオホツク文化との関係について－」『考古学雑誌』第60巻第1号

和田英昭・米村　衛　1985『嘉多山遺跡』網走市教育委員会

和田英昭・米村　衛　1993『嘉多山3遺跡・嘉多山4遺跡』網走市教育委員会

（東京大学大学院人文社会系研究科・〒113-0033　東京都文京区本郷7－3－1）

第14表　分析対象土器の容量データ①

	図版典拠	容量(ℓ)	
	武田編1996	完形品	破損品
常呂川河口15号	48図	12.1	
	49図	10.8	
	50図	11	
	51図	8.9	
	52図-1	8.8	
	52図-2	2.9	
	52図-3	1.7	
	53図-1	10.1	
	53図-2	4.9	
	53図-3	0.4	
	53図-4	0.7	
	54図-1	8.2	
	54図-2	8.9	
	54図-3	0.9	
	54図-4	1.3	
	54図-5	0.4	
	54図-7	0.3	
	55図	4.7	
	56図-1	8.4	
	56図-2	2.6	
	56図-3	1.2	
	56図-4	1.9	
	56図-5	1.2	
	56図-6	0.4	
	56図-7	0.5	
	56図-8	0.1	
	56図-9	0.1	
	57図-1		9.4
	57図-2	3.6	
	57図-3	0.8	
	57図-4		1.9
	57図-5	0.7	
	57図-6	0.5	
	58図-1	7.2	
	58図-2	8	
	58図-3	0.9	
	58図-4	0.6	
	59図-1	5.8	
	59図-2	1.6	
	59図-4	0.4	
	60図-5	0.1	
	60図-8	9.2	

	図版典拠	容量(ℓ)	
	涌坂ほか1984	完形品	破損品
松法川北岸12号	14図-1	0.2	
	14図-2	0.2	
	14図-3	0.3	
	14図-4	0.4	
	14図-5	0.5	
	14図-6	15.4	
	15図-1	0.7	
	15図-2		0.3
	15図-3	10.6	
	16図-1	2.8	
	16図-2	17.6	
	17図-1	2.7	
	17図-2	17.8	
	18図-1	1.3	
	18図-2	16.4	

	図版典拠	容量(ℓ)	
	涌坂ほか1984	完形品	破損品
松法川北岸13号	19図-2	0.8	
	19図-3	0.5	
	19図-4	0.5	
	19図-5	1.3	
	19図-6	1.4	
	19図-7	1	
	19図-8	1.4	
	19図-9	0.8	
	20図-1	4.1	
	20図-2	3	
	20図-3	4.7	
	20図-4	3.4	
	21図-2		17.2

	図版典拠	容量(ℓ)	
	青柳編1995	完形品	破損品
湧別川西２号	14図-1	4.5	
	14図-2	1.7	
	14図-3		0.7
	14図-4	0.3	
	14図-6	0.4	
	15図-1	6	
	15図-2	9	

オホーツク藤本ｅ群１類段階

第15表　分析対象土器の容量データ②

	図版典拠	容量(ℓ)	
	前田ほか編2004	完形品	破損品
トーサムポロ R－1地点1号	Fig. 9-1	3.7	
	Fig. 9-2	5.8	
	Fig. 9-3	3.5	
	Fig. 9-4	4.5	
	Fig. 9-5	0.8	
	Fig. 9-6	0.5	
	Fig. 9-7	0.5	
	Fig. 9-8	0.6	
トーサムポロ R－1地点1号	Fig. 10-1	1	
	Fig. 10-2		11.5
	Fig. 10-3		10.9
	Fig. 10-6		7.3
	Fig. 10-7		2.7
	Fig. 11-1		6.6
	Fig. 11-2		2.4
	Fig. 11-3		7.9
	Fig. 11-4		1.5
	Fig. 11-5		5.6
	Fig. 11-6		0.1

オホーツク藤本e群2類段階

	図版典拠	容量(ℓ)	
	涌坂ほか1991	完形品	破損品
オタフク岩2号	12図-2		0.2
	12図-3	0.7	
	12図-4		0.6
	12図-5	0.2	
	12図-6		5
	図版典拠	容量(ℓ)	
	澤ほか1971	完形品	破損品
オタフク岩4号	Fig. 7-1	2.5	
	Fig. 7-2	0.3	
	Fig. 7-3	0.2	
	Fig. 7-4	0.9	
	Fig. 7-5	1.1	
	Fig. 7-6	0.4	
	図版典拠	容量(ℓ)	
	涌坂ほか1991	完形品	破損品
オタフク岩7号	13図-11		0.2
	13図-12	1.1	
	13図-13		2.4
	13図-14	1.6	
	14図-15	4.2	
	図版典拠	容量(ℓ)	
	涌坂ほか1991	完形品	破損品
オタフク岩9号	14図-17		1
	14図-18	1.9	
	14図-19		1.2
	14図-20		0.8

トビニタイ古式期

	図版典拠	容量(ℓ)	
	駒井編1964	完形品	破損品
トビニタイ2号	Fig. 102-1	4.5	
	Fig. 102-2	5.7	
	Fig. 102-3	0.2	
	Fig. 102-4	4.9	
	Fig. 102-5	0.6	
	Fig. 102-6	2.4	
	Fig. 102-7	4.1	
	Fig. 103-1	1	
	Fig. 103-2	0.4	
	Fig. 103-3		4.9
	Fig. 103-4	0.2	
	Fig. 103-5	0.5	
	Fig. 103-6	5.1	
	Fig. 103-7	0.6	
	Fig. 103-8	0.1	
	Fig. 103-10		6.4
	図版典拠	容量(ℓ)	
	本田ほか1980	完形品	破損品
船見町高台1号	7図-96	7.6	
	7図-97	1.8	
	7図-98	4.1	
	7図-99	1.6	
	図版典拠	容量(ℓ)	
	米村ほか1976	完形品	破損品
ピラガ丘 第Ⅲ地点3号	Fig. 10-1		5.5
	Fig. 10-2		2.1
	Fig. 10-3	2.1	
	図版典拠	容量(ℓ)	
	椙田1980	完形品	破損品
伊茶仁孵化場 第一1号	7図-1	1.3	
	7図-2		4.1
	7図-3		2.4

第16表　分析対象土器の容量データ③

	図版典拠	容量(ℓ)	
	金盛ほか1981	完形品	破損品
須藤６号	21図-1		5.3
	21図-2	5	
	21図-3	2.3	
	21図-4	2.4	
	21図-5		0.7
	図版典拠	容量(ℓ)	
	金盛ほか1981	完形品	破損品
須藤８号	25図-1	1.7	
	25図-2	0.9	
	25図-4	0.1	
	図版典拠	容量(ℓ)	
	金盛ほか1981	完形品	破損品
須藤９号	29図-1	1.1	
	29図-2	0.1	
	29図-4	0.6	
	29図-5	0.1	
	29図-6		0.6
	29図-7		0.6
	29図-8	0.8	
	図版典拠	容量(ℓ)	
	金盛ほか1981	完形品	破損品
須藤15号	48図-1	1.4	
	48図-2	0.8	
	48図-3	1.8	
	48図-4	8.4	
	図版典拠	容量(ℓ)	
	金盛ほか1981	完形品	破損品
須藤16号	53図-1		10.2
	53図-2	1.3	
	53図-3		11
	図版典拠	容量(ℓ)	
	金盛ほか1981	完形品	破損品
19号竪穴	63図-1		1.1
	63図-2		1.2
	63図-3		2.2
	63図-5	0.2	
	63図-6	1.1	
	63図-7	0.6	
	図版典拠	容量(ℓ)	
	金盛ほか1981	完形品	破損品
須藤25号	82図-1	0.3	
	82図-3	0.9	
	82図-4	0.6	
	82図-5	1.4	
	82図-6		1.3
	82図-7		1.7
	図版典拠	容量(ℓ)	
	金盛ほか1981	完形品	破損品
須藤26号	85図-3		0.3
	85図-4	0.3	
	85図-5	0.1	
	85図-6	0.1	
	85図-7	1.6	
	85図-8		2.4
	85図-9		1
	85図-10		1.1
	85図-11		3.4
	図版典拠	容量(ℓ)	
	金盛ほか1981	完形品	破損品
須藤27号	90図-1	7.6	
	90図-2		5.7
	90図-4	0.4	
	90図-6	8.1	
	図版典拠	容量(ℓ)	
	金盛ほか1981	完形品	破損品
須藤29号	96図-1	0.4	
	96図-4		4.2
	96図-5	3.1	
	96図-6		5.6
	図版典拠	容量(ℓ)	
	椙田ほか1987	完形品	破損品
当幌川左岸竪穴群試掘竪穴	29図-1	0.8	
	29図-7		7.4
	29図-8		8.4
	図版典拠	容量(ℓ)	
	和田ほか1993	完形品	破損品
嘉多山３　３号	図28-1	5.2	
	図28-2	4.8	
	図30-2		5
	図30-3		2.5
	図34-1	2.2	
	図版典拠	容量(ℓ)	
	和田ほか1993	完形品	破損品
嘉多山３　５号	図44-1		4.3
	図44-2	2.7	
	図44-3		2.8
	図46-1		3.5
	図46-2	6.9	
	図48-1		5.7
	図48-2	1	
	図48-4		0.8
	図48-5	0.7	
	図52		24

トビニタイ新式期

第17表　分析対象土器の容量データ④

	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1972	完形品	破損品
岐阜第二8号	Fig. 61-1	4.9	
	Fig. 61-3	3.2	
	Fig. 61-4	0.6	
	Fig. 61-5	0.6	
	Fig. 61-6	0.1	
	Fig. 61-7	0.2	

	図版典拠	容量(ℓ)	
	和田ほか1993	完形品	破損品
嘉多山3　6号	図60-1		6.1
	図60-2	10.4	
	図62-1	6.3	
	図62-2		7.6

道東擦文中期

	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1972	完形品	破損品
岐阜第二2号	Fig. 35-1	14.4	
	Fig. 35-2	1.2	
	Fig. 35-3	1.8	
	Fig. 35-4	0.7	
	Fig. 35-5		1.1

	図版典拠	容量(ℓ)	
	武田1992	完形品	破損品
史跡常呂1号	Fig. 3-5	11.1	
	Fig. 4-1	1	
	Fig. 4-2		9.9
	Fig. 4-3	0.8	

	図版典拠	容量(ℓ)	
	武田編2000	完形品	破損品
常呂川河口43号	236図-1		4.9
	236図-2	1	
	236図-3	0.6	

	図版典拠	容量(ℓ)	
	武田編2004	完形品	破損品
常呂川河口84号	41図-1	0.1	
	41図-2	1.7	
	42図-1		7.4

	図版典拠	容量(ℓ)	
	武田編2005	完形品	破損品
常呂川河口139号	133図-3	1.5	
	133図-4	7.1	
	133図-5		0.6
	133図-6	0.7	
	134図-5	13.4	

	図版典拠	容量(ℓ)	
	加藤ほか1982	完形品	破損品
広瀬2号	8図-1	1.2	
	8図-2	0.9	
	8図-7		16.3
	9図-3		0.7

	図版典拠	容量(ℓ)	
	石川2005	完形品	破損品
幣舞2　2号	14図-1		2.6
	14図-2	7	
	14図-3	1.9	

	図版典拠	容量(ℓ)	
	石川2005	完形品	破損品
幣舞2　3号	17図-1	2	
	17図-2	3.5	
	17図-3	2.6	
	17図-5		15.7

	図版典拠	容量(ℓ)	
	石川2005	完形品	破損品
幣舞2　8号	34図-1		12.6
	34図-2		6.8
	34図-3		7.4
	34図-8		10.5
	34図-9	11	

	図版典拠	容量(ℓ)	
	澤1972	完形品	破損品
下田ノ沢2号	15図-5	8.6	
	15図-6	1.9	
	15図-7	0.8	

道東擦文後期

第18表　分析対象土器の容量データ⑤

	図版典拠	容量(ℓ)	
岐阜第二10イ号	東大編1972	完形品	破損品
	Fig. 73-1	17.2	
	Fig. 73-2	8.8	
	Fig. 73-3	14.9	
	Fig. 73-4	6.4	
	Fig. 73-5	0.8	
	Fig. 73-6	0.7	
岐阜第二11号上層	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1972	完形品	破損品
	Fig. 82-1	8.2	
	Fig. 82-2		7.3
	Fig. 82-3		5.6
	Fig. 82-4	2.4	
	Fig. 82-5	0.2	
	Fig. 82-6	1.4	
岐阜第二14号	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1972	完形品	破損品
	Fig. 101-1		11.9
	Fig. 101-2	1.1	
	Fig. 101-3	4.6	
岐阜第二W4号	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1972	完形品	破損品
	Fig. 129-1	0.3	
	Fig. 129-2		0.8
	Fig. 129-5		0.2
岐阜第二W8号	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1972	完形品	破損品
	Fig. 133-1	0.5	
	Fig. 133-2	0.8	
	Fig. 133-3		0.6
	Fig. 133-4	0.2	
史跡常呂3号	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1992	完形品	破損品
	Fig. 14-2	0.9	
	Fig. 14-3	3.2	
	Fig. 14-5	1.9	
岐阜第三1号	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1977	完形品	破損品
	Fig. 5-1	16.1	
	Fig. 5-2	1.8	
	Fig. 5-3	0.6	
	Fig. 5-5		1.4
	Fig. 5-6	0.3	
岐阜第三5号	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1977	完形品	破損品
	Fig. 19-1	1	
	Fig. 19-2		1.4
	Fig. 19-3	1.9	
	Fig. 19-4	0.4	
	Fig. 19-5	22.6	
ライトコロ川口4号	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1980	完形品	破損品
	Fig. 11-1	11.9	
	Fig. 11-2	7.7	
	Fig. 11-3	0.5	
	Fig. 12-1	10	
	Fig. 12-8	1	
	Fig. 12-9	4.3	
ライトコロ右岸10号	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1995	完形品	破損品
	Fig. 19-1	16.8	
	Fig. 19-2		6.9
	Fig. 20-1	19	
ワッカ4号	図版典拠	容量(ℓ)	
	東大編1972	完形品	破損品
	Fig. 158-1	21.3	
	Fig. 158-2	0.9	
	Fig. 158-3	0.7	
朝日トコロ貝塚Fトレンチ内	図版典拠	容量(ℓ)	
	駒井編1963	完形品	破損品
	Fig. 88-1	4.2	
	Fig. 88-2	4.4	
	Fig. 88-3		6.4
	Fig. 88-4	0.5	
	Fig. 88-7		0.2
栄浦第二1号	図版典拠	容量(ℓ)	
	駒井編1963	完形品	破損品
	Fig. 9-1	0.9	
	Fig. 9-2	15.5	
	Fig. 9-3	2.5	
	Fig. 9-4	20.2	
	Fig. 9-5	1.9	
	Fig. 9-6	2.7	
	Fig. 10-1	0.8	
	Fig. 10-3	0.4	
	Fig. 10-4	0.2	
	Fig. 10-5	0.7	
	Fig. 10-6	0.1	
栄浦第二2号	図版典拠	容量(ℓ)	
	駒井編1963	完形品	破損品
	Fig. 13-1	15.1	
	Fig. 13-2	2	
	Fig. 13-3	2	
	Fig. 13-4	5.9	
	Fig. 13-5	0.8	
	Fig. 13-6		1.1
栄浦第一30号	図版典拠	容量(ℓ)	
	武田編1995	完形品	破損品
	309図-1	1.9	
	309図-3	0.1	
	309図-5	0.3	

道東擦文晩期①

第19表　分析対象土器の容量データ⑤

	図版典拠	容量(ℓ)	
常呂川河口7号	武田編1996	完形品	破損品
	20図-1	9.1	
	20図-2	0.7	
	20図-3	0.4	
	20図-4	0.2	

	図版典拠	容量(ℓ)	
常呂川河口9号	武田編1996	完形品	破損品
	24図-1	13.2	
	24図-2	0.3	
	24図-3	0.4	
	25図-1	7	

	図版典拠	容量(ℓ)	
常呂川河口63号	武田編2002	完形品	破損品
	104図-1	0.1	
	104図-3	0.6	
	104図-9		4.6

	図版典拠	容量(ℓ)	
常呂川河口122号	武田編2005	完形品	破損品
	9図-1	1.9	
	9図-2	0.4	
	9図-3	9	

	図版典拠	容量(ℓ)	
豊里B号	大場ほか1960	完形品	破損品
	24図-6	0.4	
	24図-7	3	
	24図-9	0.5	

	図版典拠	容量(ℓ)	
広瀬3号	加藤ほか1982	完形品	破損品
	10図-1	0.7	
	10図-2		7.2
	10図-3		0.3
	10図-6	14.6	

	図版典拠	容量(ℓ)	
嘉多山2号	和田ほか1985	完形品	破損品
	図23	7	
	図24	5.8	
	図25	5.6	
	図26		6.1
	図27-2	0.2	

	図版典拠	容量(ℓ)	
オタモイ1 PIT1B	松田ほか1983	完形品	破損品
	10図-3		4.2
	10図-4		11.4
	10図-5		3.4
	10図-6		11.5
	10図-7		3.6

道東擦文晩期②

	図版典拠	容量(ℓ)	
西月ヶ丘1号	河野ほか編1983	完形品	破損品
	Fig. 20-1	6.2	
	Fig. 20-2	7.9	
	Fig. 20-3	0.9	
	Fig. 21-1		7.3

	図版典拠	容量(ℓ)	
西月ヶ丘7号	八幡ほか1966	完形品	破損品
	34図-1	0.4	
	34図-2	0.6	
	34図-3	0.2	

	図版典拠	容量(ℓ)	
幣舞2　22号	石川2005	完形品	破損品
	71図-1	10.2	
	71図-2	12.3	
	71図-3	0.1	

	図版典拠	容量(ℓ)	
北斗20号	石川ほか編1992	完形品	破損品
	53図-1	13.7	
	53図-2	3.1	
	53図-4	4.1	
	53図-5	2.6	
	53図-6	0.5	

	図版典拠	容量(ℓ)	
北斗21号	石川ほか編1992	完形品	破損品
	62図-1	15	
	62図-2	8.5	
	62図-3		2.6
	62図-4	5.5	
	62図-8	0.2	

	図版典拠	容量(ℓ)	
北斗33号	石川ほか編1993	完形品	破損品
	8図-1	18	
	8図-2	12.3	
	8図-3	1.6	

	図版典拠	容量(ℓ)	
下仁々志別竪穴群B群4号	西ほか1983	完形品	破損品
	17図-4	0.7	
	17図-5		0.6
	18図-1		2.1
	18図-2		3.1

	図版典拠	容量(ℓ)	
十勝太若月16号	石橋ほか1974	完形品	破損品
	Fig. 50-1	19.1	
	Fig. 50-2	3.9	
	Fig. 50-3	11	
	Fig. 50-4	1.8	
	Fig. 50-5		10.4
	Fig. 50-6	0.4	
	Fig. 50-7	1	
	Fig. 50-8		2.1
	Fig. 51-1	1.7	
	Fig. 51-2	11.2	